

(邦訳)

ユリウス・フレーベルの『自伝』より

— 誕生からカイルハウ学園時代まで —

人文学部教授 勝 山 吉 章

序文

すべての自伝は自己を正当化するにちがいない。これもそうだろう。この点に関して私は、私の自伝が吟味され正当に評価されることを望みますなどと、前置きしなくてもいい。

真実と虚構がうまく結びついていたといっても、私の文学的な名誉心はそんなに高まらない。記憶と自己観察に間違いがないかぎり、私は真実のみを話している。何が話す価値があり、何が話す価値がないのかについて、私がちゃんとした尺度をもっていかどうかは分からない。まあ、様々な人間の興味によれば、それに対する判断もちがってくるだろう。しかしながら私は、私自身の判断のなかで、私自身を描いている。そしてそれは常に核心を貫いている。

様々な時期にとって、私の手書きメモや私が出版した印刷物が役立った。他の場合、全く記憶に頼らざるをえないが、この記憶の程度は様々であるが信頼できる。だが、私の物語を詳しくしたり、ビビットにしたりする際に、この記憶に起因する不正確さを避けることは出来なかった。

新世界での私の放浪やさすらいについて、詳細に話すことができるだろう。そして、私はヨーロッパの読者にはほとんど知られていないところにもいたのだが、私の人生をちゃんと知ってもらうために、そのようなところも描かねばならなかった。だが私は今述べているこの二巻本のなかで、私が『アメリカから』というタイトルで刊行した内容の多くを繰り返すことを避けた。『アメリカから』には、見知らぬ世界への客観的関心が前面に出ており、私の個人的生活は背後に追いやられているが、このことは私の現在の意図にはそぐわない。ここでは私は、私と私の体験に直接関わることなく、自然の景色や人間社会の現象について書くことはしなかった。この二巻本を私は、私自身を語る手引き書として利用した。内容には多くの新しいことや個人的なことを付け加えたので、私の今回の描写は特別な特徴をもっている。

私の生活状況や運命は、歴史的に重要な時代の出来事と多様に組み合わせられているので、歴史家は、このなか

に二～三の注目に値する資料を見出すだろうし、さらに好意的な読者は人間や世界認識に役立ったというだろう、と私は思うのだが。

私がこの序文を書いたのは、はるか前、アルジェリアにいた1880年の4月だった。今、私は、草稿を新たに校正した。相当な内容が削除され、若干の内容が補足され、わずかな付け足しでもって歴史を現在まで継続した。この歴史だが、私はもう高齢であるから、何らかの話す価値のあることを私はもうほとんど個人的には体験しないだろう。だからこのへんでペンを置いてよいと思う。

チューリッヒ、1889年4月

ユリウス・フレーベル

第1章 子ども時代、青年時代そして人生の最初の試練

1節 グリースハイムの古い田舎牧師の家庭で、そしてルードルシュタットのギムナジウムの第4級学年で。田舎では9歳の自由精神と形而上学者。そして町では10歳の劇場常連者。早熟な享楽時期、10歳頃とはあまりに幼い。芸術から自然へ、シラーからルソーへと時期をえた帰還。汎神論的な自然没頭そして詩作。

私の父はプロテスタント系の神学者だった。そして、チューリングゲンのグリースハイム村で母方の祖父の代理として牧師職についていた。グリースハイム村はシュバルツブルク＝ルードルシュタット侯国に属している。この小さな村は、田舎のつましい地方にあって、その大地のほとんどは農地である。近くにある高地や森は変化に富んでいる。ところで、この地域の質素な装いといえはイルム川のささやかな流れだ。イルム川は牧場、ポプラ、ハンノキの影に隠れ、村の小さな牧場の岸辺からシュタット＝イルムの村を超えて、遠くのワイマールへと流れている。西の地平線には、ぼんやりとはあるがチューリングゲンの森の素晴らしい峰々が微かにみえる。このような村で私は1805年に生まれた。

子どものとき私は、私たちの父方のファミリーがオラ

ンダからやって来たと言っていたが、私はそれは間違っていないと思っている。私は後年、ヴァージニアに旅したとき、数世代前から当地に移住していた、私たちの名前をもつオランダ系のファミリーに出会った。このファミリーは新聞を通じて私の滞在に注目し、手紙で私を親類として歓迎してくれ、別荘に招待してくれた。私の母のファミリーは、ノールス (North) と言うが、イギリスの出所である。残った一族は郷里で名望ある地位を得た。そして有名な Lord North という人において、イギリスの重要な政治家を輩出した。この方から、母方の家系に、ハンガリーからのスラブ系の血が入った。ドイツ民族の純血主義にとりつかれている友人は、この混血に憤り、不幸な成り行きの原因をここに帰した。私が、ただ一国の生活圏のなかで満足を感じるわけにはいかないコスモポリタンの特徴を生まれつきもっていることは確かだ。偏狭なドイツ愛国主義を、皆のように非常にいやに感じることを否定はしないが、だが私は良きドイツ人であると思っている。

私の父の神学的見解はその時代のナショナリズムの見解だった。ナショナリズムのサイドで父はゲマインデに祈りを捧げ、この精神の影響下で私や私の三兄弟は幼い子ども時代を過ごした。8歳という大変幼い時にはもう、宗教的概念に関する合理的見解が私の存在の一部を占めていたので、私は村の農家の少年と取っ組み合いの喧嘩をしてしまった。というのも、彼らは、私が否定した悪魔の化身の存在を主張したからだ。その際、彼らは村の学校親方の権威に依存した。この学校親方は、農村の教会音楽のオルガン弾き兼指揮者として聖歌隊指揮者 (Kantor) という肩書を担い、合理主義的な牧師と対立して保守的な正統信仰の立場をとっていた。私の父は、村の学校にベスタロッツのメトデーに従った初等教授を紹介し、スイスからこのメトデーに必要な教材を調達してきた。だが、老いた歌隊指揮者から悪魔を追い出すことを父はしなかった。ルター博士でさえ、この悪魔とは取っ組み合ったのだが。ところで、村にはまだ、確かに、異教のゲルマン的な迷信が支配していた。そのほとんどは今はないだろう。「ホーリーおばさん」を、農村の全ての少女が恐れ、水の精を大きな子どもも小さな子どもも恐れた。Willing 山に住み、小人と戦争をした Riesen (巨人) の神話やメルヘンは、まだ Singer 山の内奥で生きているかもしれないが、これらを私は子どものとき真面目に信じ切って物語るのを聞いた。私たちは、廃墟にお定まりの神話で育てられた作り話を信じることは、悪魔の化身と同様になかなか受け入れ難かった。そのことによって私は、私たちの早熟な合理主義が常に恐怖を防いできたなどと言うつもりはない。恐怖は私に不確かななかで、何かしらの亡霊をうつしだしたかもしれない。それにもかかわらず、私の合理主義は、幼いときにすでに私の幻想よりも強化されていた。私は

覚えているが、私は一度、月明かりの夜にびくつきながらも、両手で古い柳の幹をつかむまで、恐ろしくみえる影にとびついた。私の弟、カールは、私はほんの9歳だが、彼は8歳で、形而上の問題を論じていた。私たちのうちの一人が、前を流れるイルム川は何万億もの水の分子を含むことができない、水の分子は多く (Soviel) 以上ではなく、たくさん (Großte Zahl) だ、と主張する。そうすればもう一人は「君のたくさん (Großte Zahl) に僕はもうすこし加える」と反論した。

私の母は、ナショナリズムにおいては私の父の背後にはいなかった。彼女の実父は私たちと牧師ハウスに住み、ハンフリート派に属していたが、その実父と母は宗教論争をしばしば行った。その論争のなかで彼は母を自然宗教論者 (Naturalistin) と呼んだが、母は敬虔主義に対する聖パウロの格言をもちだしては論争場にくりだした。だが、私の母の精神的関心事はとりわけ政治的なことだった。彼女は熱心な新聞読者であり、80歳で死ぬまでそうであり続けた。世界中の出来事について彼女は誰かと話さずにはおれなかった。だが、高い教養をもつ人が周囲にいない場合は、彼女はまあ賢い田舎のおっさん (Landmann) で我慢した。私は学生時代に、シラーで有名な田舎町に彼女に会いに行った際に—当時彼女が住んでいた—、私たちは真夜中にたたき起こされたことがあった。窓の下で、そんなにおそく町から帰ってきた農夫が立っており、叫んでいた。「牧師婦人、おきろ! Citadelle だぞ!」—それは Antwerpen (ベルギー) 州なまりだった—。でも彼女は庶民といい関係を結んでいたもので、教養ある人は彼女との会話を楽しみ、そして上流階層の婦人たちは彼女を評価したし、また、彼女の友達だった。彼女は中背以上で、少々骨太で、たくましかったが、神経は繊細だった。そんなんだから、彼女は病床であっても、興味ある会話によって刺激されると、ガバツとはねおきることも可能だった。彼女の顔は、色の黒い顔と淡い褐色の目で刺激的であったが、年取ってもなお、その顔は他人を魅きつけた。彼女が79歳のと、私は、ながらもヨーロッパを離れるために彼女に永遠の別れを告げたが、その時彼女は、ほとんど無傷で残っている歯と、濃い繊細な黒いちぢれ毛をもっていた。その黒いちぢれ毛を私は、短く刈ってあげていたのだが、白髪はほとんどなかった。身体と同様に堅固だったのが精神だった。彼女の力強いリアリズムは死の直前まで持続した。70歳のとき、彼女はなお純然たる好奇心から、チューリッヒからガイドなしでリーギー (スイス) への小旅行を企画した。その際、彼女は人生ではじめて馬に乗った。また、そのころチューリッヒから象をともなった動物園がやってきたが、彼女はたまたま病気で家にいたのだが、その間中、私は象を見ることなく死なねばならないのだわ、と嘆く声を私は聞いた。こんな実利主義的な傾向は、世の中の現実の物事に対する好奇心や関心として

表れただけでなく、頑固さにおいても表れた。その頑固さは彼女をしばしば家族のなかで独善や独りよがりへと導いた。彼女は強い実権をにぎり、係争関係においては弁護人の才能を発揮した。彼女自身が文書や口頭でルードルシュタット宗務局のまえで行った係争を、彼女は後年にいたっても自慢した。彼女の性癖には、イルム川の全ての水を必要とするような潔癖症も含まれた。幸運なことに、このイルム川は私たちの家の後ろを流れており、彼女がその性癖から全く清潔であって欲しいものを、彼女はみずから川のなかで洗い流した。だから、冬には水の表面に穴をあけねばならなかった。後に彼女が、川の辺に住めなくなったときは不幸だった。そして彼女は、その都市が住民に課した水の使用制限ゆえに都市を憎んだ。流れる水が各階にあり、常に冷たい水か暖かい湯が出るお風呂が寝室の隣についている良く設備されたアメリカの家を説明することによって、人は彼女を間違いのない高齢においてもなお、海洋の上を連れていくことができた。水洗いするというようなこの潔癖症と一致して、彼女はまた思考停止や道徳的な汚れを嫌った。そして恐いもの知らずに彼女は、フランス革命が始まってから、泥沼化した世界を掃きだした政治的暴動の味方をした。私たちの村を通過したり、時々やっかいな舎営をもちこんでくるその部隊行進によっても、彼女は感情を害さなかった。

私の父は、その心情においてそれほど激しくはなくとも、母と同様な考えだったので、私や私の兄弟に幼いころから精神の自由なる方向性が与えられていたことは自然なことだった。とはいうものの、私たちの思考は、両親を通じて何ら革命的な色合いをもたなかった。私は時たま「ユンカー・カール」とはちがって、彼は私とだいたい同じ年で、Hoheneckのグーツヘル（莊園領主）で教会パトロンという貴族の息子だが、その彼と私は仲良しだったが、私は虐げられた農村少年に味方した。また、私の兄弟の一人が貧しい子ども達が非合法に薪を集めるのを手伝ったりしたが、それらは慈悲的な心情から生じたことであり、民主的な感覚や社会的な主義主張の何らかの予感というものはなかった。反対に、幼いころの私は貴族主義的な空想や欲求をかき立てられた。教会を修築したとき、地下に埋葬されていた、この村ではその名を知られたグリースハイムの男爵家の遺体の一部が現れた。柩で私は、刀や金箔に覆われた一對の鉄拍車を発見したが、それらももらった。私の大おばさんは、自分の母がグリースハイム生粋のお嬢さんだったことから、自分たちの祖先の身分を表すこれらのしるしをもつことの正当性を主張し、私が占取することを許した。それ故に私は、喜んで拍車を自分の小さな足にくっつけ、刀をくりつけ、瀆神的な正装で村をいばって歩いた。そうすることが、農民の子ども達に具体的なかたちで身分上の私の卓越を感じさせているなんてつもりはなかった。ま

た私の母の家族には、高尚な官吏貴族主義の心情やお高くとまった態度があった。そして私は次のように話すのを聞いた。冬の夜、シュバルツブルク＝ルードルシュタットの領主侯妃が、従者に糸車を運ばせながら、岸壁の上の、町の上に聳えるりっぱな城から、私の曾祖母さんつまり宮廷顧問婦人Northを訪ねてきたと。私の母もそうであったが、彼女から私は政治的性向を受け継いだ。私は父からは静観的で熟考的な性向を受け継ぎ、また自然に対する興味、理解、心情を受け継いだ。それは後年、私が教育を受けるにあたって生まれるのだが、さしあたって長年、私のところを大きく占めていた。私の父には、チューリングンの森の代々の林務官や狩猟者の家系からうけついで狩猟者気概が残っており、二世代がインテリ故に弱まったとはいうものの、父は、その気概をチューリングンの民衆的熱情と一致させながら、時々行う捕鳥において満足することを求めた。父は、自らの「林道」を通して、はんの木の森に入り、罨にかかったつぐみ鳥をとったりしたが、そのような父に同行するときに私にとって最も幸せな時だった。そのことで鳥の博物学は私にとって学問的に最も引きつける対象となった。とくに私は猛禽に熱中した。猛禽は私を最も生き生きとひきつけた。数時間、私は猛禽が空中を気高い静けさでもって滑空する空間を監視できた。だから私は、違う時代に違う場所で生まれたならば、鳥占者であったろうことを疑わない。なお後年私は、船縁から波間を漂う水鳥を見たり、ニカラグアの海岸の陰になっているところから、遙か上の澄み渡った天空を静止しながら滑空している熱帯鳥を見上げるために多くの時間を過ごした。だが、子ども時代には私は、ハエの詩に大変心をとられていたので、自分で飛べる夢をみるのが、おやすみの時の最も素敵で幸せなことだった。長年にわたって私には、さまざまなかたちでこの夢が常に繰り返された。まず私は村の家々の屋根の上を飛び回り、全ての住民がびっくりして私を見上げていた—後には、山の上から山の上へ森を越えて、そして奈落へ。真空に向けられていた空想は、キャンプでの子ども図書館で、探検旅行の歴史が朗読されたとき、今度は堅固な静止点を見いだした。今や、遠くの国々に対する憧れが、そこではロマンと知識欲が統合されていたが、私のところをとらえた。

一方で私の父は、多様な実利的な活動を示すことによって、私の子ども時代の性格に実利主義的な性格をもたらした。牧師夫人と「教区所有地」で農業をおこなっていたが、その収益は職の収入の主要な部分を占めていた。そして父は、熱心に専門的な知識をもって、母の力強く賢明な援助を得ながら、その仕事に没頭した。私たち子どもも、小さな力の及ぶかぎり、農作業を手伝った。収穫のとき、穀物を束ねている人の後ろで、落ち穂を集めたり、二つの園を開墾するのを微力ながら手伝ったりした。私の父は、自分自身で種から育てた苗圃をりっ

ばに開墾した。そしてその台木に、フランクフルトから取り寄せた極上の果物の種を植え付けた。この果物の枝で父が園芸の作業をするとき、私はいつも彼の傍らにいた。その際に私は、様々な継ぎ木のやり方を知り、その結果私は、ほんの数年後に、私の叔父であるカイルハウのフリードリッヒ・フレーベルの教育舎で私が、自分で育てた苗圃がある私自身の小圃をもったとき、接ぎ木の技術を上手く行うことができた。当時、果樹栽培はグリースハイム地方では最も低い段階にあった。村の家々の園には、平凡な種類の果物の木があった。食べられない実をつける二つのなしの木が村の郊外にあった。隣村の Branchewinde には食べられる実を付けるなしの木があり、私たち子どもにとっては驚嘆の的だった。一年ごとに、父は私たちのファンタジーを捉えた。私は覚えているが、ある秋に、私の家族全員が Branchewinde のなしの木の美味しい実から、生活のための糧を得るためにどのように牛車で出かけたかを。それは1805年から1814年の間で、私の生誕地の地方であった。50年以上経ってから、私は一度、その地へ行った。私はそのとき、その村々が実のなる木々に取り囲まれているのを見て喜んだ。そして少しの自慢は、私の父の苗圃が村々の改善に役立ったことだった。

私たちの父は、私たちの年齢に相応しい授業を私や兄弟に自分で行った。父はその際に、ペスタロッチのメトードを用いた。ペスタロッチのメトードは、当時、ちょうど教育学での一大変革を引き起こしていた。父は、ペスタロッチのメトードのための問題や教材を自分の弟・フリードリッヒから得ていた。フリードリッヒは数年、イベルドンのペスタロッチのもとに滞在した。私の祖父 North はそれには全く満足しなかった。祖父は私たちが何も学んでいないと嘆いた。そして、私が彼の部屋にいたとき、祖父は父の放任を正すために、秘密で祭壇を清掃させた。最も簡素な方法で、私たちの家庭では、何らかの音楽もなされた。私の父は、上手くないがピアノを演奏した。そのピアノは、今では、燃料としてしか売れない代物だったが、彼はその際に私の母のお気に入りの歌を歌った。「なぜ、涙は月の下にそんなにあるの？」と母と一緒に歌い、涙した。そして半分は自分自身の感動から、半分は手本につられて、私も泣いた。だがゲーツヘルのお城で、私は高貴な教育の第一の基礎を教えられた。私はフランス語の授業に参加した。その授業は Hoheneck の修道女が Hoheneck の子ども達に行ったものだった。

私たちの村以外の世界では、当時、私はほんの少しの隣人と知り合いになったにすぎない。ときどき私たちは、一つかそこらの近隣の地を訪問した。そんななかで二つの記憶が残っている。一つめは、Rochberg の Stein 家に関してだが、そこで私の父は神学者の候補者として家庭教師をやったことがあり、彼は人に好印象を与えて

いたように見えた。ゲーテの有名な愛人の肖像は、長い年月を通じて私の記憶のなかで色あせているが、私はなお、Stein 夫人が私に対して非常に好意的であり、私には彼女が高貴な存在に見え、私自身ひきつけられたことを自覚している。その淡い姿は私には中年の夫人をイメージさせたが、その素晴らしい夫人は当時、すでに70歳になっていたにちがいがなかった。もう一つの訪問というのは、近くの Behringen 村へ、当時、まだその農地に居住していた Kettelhodt 家への訪問である。その子ども達は、しばしばグリースハイムの Hoheneck 家の子ども達のところへ来ており、私も彼らの遊び友達だった。Kettelhodt 家のマキシミアンは、私たちのガキ大将だったが、後に英国女性と結婚し、そのことによって彼はジャマイカのプランテーション所有者となった。だが、そこで彼は、1865年の黒人反乱によって、個人的な憎悪や扇動者の一人の悪意の犠牲者となった。彼の名前は、この悲劇的な事件によってイギリスで大変有名となり、彼のルードルシュタットに存命のきょうだいは、彼のために文学的な記念碑を建てたが、その碑文のなかで私が遊び仲間であったことを述べてくれた。

既述したような状況のなかで私は9歳になったが、その年、1814年に私の父が、行軍中の軍隊によって土地にもたらされた発疹チフスが原因で死亡した。その出来事が私の心に与えた印象は、恐ろしいものだった。今日なお、公共墓地が眼前に横たわり、その縁で私の母が泣き崩れ、私たち子ども達もひどく泣いていた。そして、わたしが回想するとき、私にはなお地域の人達によって歌われた挽歌が聞こえる。その間、棺が埋められ、土がかけられた。さらにすぐ、私の母が悪性の熱に冒されたが、幸運なことにその熱に負かされなかった。私自身はすでに父の死を幸運にも克服した。無邪気な子ども時代は過ぎ去った。

父は家族に何らの財産も残さなかった。しかも父は時々、収入に即応した以上の本を買い込んだため、母から抗議されたが、言い返していた。「私の本は、私が子ども達に残す宝物だ」。宝物の価値というのは、人がその扱い方を知っている利用価値が問題なのである。父の死の直後の半年か一年は、私も兄弟も書物には一瞥もしなかった。私たちは、17世紀や18世紀の神学所や哲学書の扱いといえば、そのりっぱな大きな本から、すでにインクがついた豚革の表紙を奪うか、有名な著者の肖像を奪うかすること以外の扱い方を知らなかった。幸運にも、私たちの注目を引かなかった若干の特別に価値ある著作が、後に、ルードルシュタットの侯立図書館に売却された。残りは父が数年、そのままにしていた木箱に詰められていたが、あるときの火事で、消化を急ぐあまり、これらの木箱が上の階から通りに投げ捨てられた。そのとき、木箱がこなごなになり、高価な中身もまき散らされ、消防ポンプに轆かれ、馬や人によって泥のなかで踏

みつげられた。だから、父の遺産は利用されることなく、消滅した。だが私は、図書館から売却益をえていた。私はハサミとナイフで図書館を探検したとき、Wielandの妖精オペロンやBoßschのホメロスの翻訳に出会った。9歳や10歳のとき、私の理解力は未熟であったのにちがいがなかったが、詩には抗しがたく引きつけられ、虜になった。だから私は、一週間の大部分を読書室で過ごし、とうとうイリアスのオデュッセイアやオペロンを読破した。

私の母がまだ牧師職の収入を受け取り、牧師の宿舎に住むことが出来た年は終わり、彼女の前に、骨折りの多い、不安だらけの生活への暗い見通しが広がった。彼女はイルムの町の耕作地に少しの土地をもっており、その土地の耕作で自分の子ども達を養おうとした。だが収入はせいぜい、表面上の飢えと困窮を遠ざけたにすぎなかった。だが三人の息子と一人の娘の養育や教育にかかる必要なものを、その収入では、ほとんど賄うことは出来なかった。そして—私たちが所属していた階層の見解によれば—私たち兄弟が勉学せねばならないという以外に、どのような自明のことがありえただろう。それは当時の田舎牧師家の生活観や社会的地位にとっては特徴的なことだったが、親しい人から、私たちの兄弟の一人を薬屋にしてはどうかと勧められたとき、全く私たちの貧しさにもかかわらず、私たちはそれを侮辱と感じた。高度な教育を前提とする以外の職業は、私たちの家族にとっては価値のないものとみなされた。だが、そのような自負を満たすだけの資金をどこから得られるというのだろうか。

その問題は、まず、兄弟の最年長としての私にあたって、決心がなされた。そのとき、明らかに、長くて不確実な道程の第一歩のみが眼前に据えられ、その先を見通すことは恐くてできなかった。また私の兄弟のためにも、決心がなされねばならなかったのだが、その前に、状況や見方が変わった。私の人生には、宿命論的な大胆さが典型的に残っており、その大胆さのおかげで私は学業を決心した。10歳のとき—1815年—私はルードルシュタットのギムナジウムの最下級クラスに入った。グリースハイムの荘園領主は、その小さな首都で、私の世話をするために、その影響力を行使することに成功した。多くの上流家庭のなかから、私は特待生となった。そして、この上流家庭がたくさんあったので、週の毎日、私は多様な扶養が提供された。私は余った食事を金に換えた。だから私は毎日、あちこちの家で昼食をごちそうになり、他の慈悲のところを歩き回り、接待で毎週の贈り物を得た。

最初、私はこれらのことを、おどおどと恥ずかしげに行った。なんだか私は物乞いの子どもに成り下がったような気がしたからだ。だけど、人が私に対して友好的であったことと、私があまり気にしない質だったことか

ら、このような感情も長続きせず、物乞いだなんて思わなくてもよくなった。私はのんきに過ごし、必要以上のものに満たされていた。村や両親の家から私は、腐敗していない敬虔な心情や、謙遜、知識欲、苦難に耐える才をもってきたのだった。ペスタロッチの直観教授が私を放任したように、ギムナジウムの学年の勉強準備をすることがなかったので、私は末席をとった。だが、私が進捗に目立つよりも前にもう、私はたびたび学友たちに、如才なさ、勤勉、良き行いの模範生として批判された。私の若干の恩人たちのなかにあっても、私はひいきされた。同様なことは、私がたびたび宗教的で哲学的な質問を投げかけたFederli校長においても。校長は大変友好的にその質問を引き受けてくれた。そして、後に聞いて知るのだが、彼は、将来私はひとかどの者になると思っていた。この善良な人が、その思いが実現されたとして満足したかどうかは、私には疑わしい。確かなことは、私が既に当時、危険な道に入り込んだということだ。

不幸にも私は劇場床屋の家に住み着いていたが、そこには私以外にも最上級生が数人居て、怠惰な雰囲気支配していた。冬には夜遅くまでカードをやり、夏には、有名な鳥討ち会の間、娯楽月間のために雇われた俳優一座がルードルシュタット住民の審美的教養形成に従事し、その俳優一座に所属する数人の婦人が私たちのところを出入りした。そして彼女たちは私にも、この教育的慰安に参加させた。私には一人の可愛い少女が記憶に残っている。彼女はある日私にこう言った。「残念、あんたが10歳でなかったら」と本当にやさしくキスした。それは私の「軽佻浮薄」における最初の授業だった。私は軽佻浮薄の素質がないことはなかったし、人生が私にそれほど真面目に立ち向かっていなかったら、私はもっと軽佻浮薄だっただろう。私の家主は、仕事の傍らにときどき私を劇場に連れていったが、そこで私は、内幕の後ろで好奇心を満足させることができた。私は土間席の方が非常に面白かったため、余った席料で、いつでも自分で席を手に入れることができたし、私が入場料を払ってやることによって、級友の誰かと仲間になれた。だから私は劇場の常連客となり、シーズンのレパトリーを完全に熟知した。それで、私はあるだけのお金を自由気儘に使っていた。私は友人をルードルシュタットの有名な焼きソーセージや、果物や、菓子でもてなした。かき集めた席料が不十分なとき、私は負債をしたが、理解しがたいことは、11~12歳の私が、果物屋、菓子屋や他の甘物屋で、身寄りのないこの身で信用貸しを得られたことであった。それが大きかったため、私は1年半の滞後にグリースハイムに帰ったとき、私がルードルシュタットに残した借金は60ターラーになっていた。その借金を私の貧しい母が支払わねばならなかった。私は彼女が、私の金銭的な罪状が全てあからさまになったというような顔で私の前に居るのを見た。そしてまずは恐れ、

立腹し、私に対して腕をふりあげ、泣き笑いの入り混じった顔で、再び腕をおろした。だけど理解しがたいことは、私に与えられた信用貸しと同様に、どんなことでも知れ渡らないことはないような小さな町で、私の怠惰な生活が私の慈善家に知られることがなく、彼らの好意が阻害されることがなかったことである。彼らのなかでただ一人だけ、私にある日、理由もなくいつもの贈り物を止めることを通告してきた。そして、アホなろくでなしになった私は、何が彼をこうしたのか不思議に思った。

それにもかかわらず、すぐに、不快な感情が私を襲った。その感情は、私の良心にやましいことだが、強そうな錠前従弟への恐れから来るものだった。こいつは、私の劇場仲間への私の気前良さを見ていたらしく、同様のことをこいつにもするように求めた。その気のないことを私が示すと、こいつは人けのないところで私を待ち伏せて、金を要求し、脅し、暴力を振るおうとした。私は恐怖から、彼の要求に何度も屈服したため、彼からもはや逃げられなくなった。さらに私の苦悩が増したことは、この嫌な奴から強いられた交際を、ギムナジウムの学友たちに知られたことである。三年生の彼らの誇りは、無教養な民衆学校出の者との交友が我慢できず、私がギムナジウム生の地位に相応しくない交友を止めなければ、クラスは私との一切の交際を断つと通告してきた。

私が不愉快に思うことの原因にはさらに、劇場通いを通じてそうなった私の墮落が、学校での成績や態度に影響を与えないではいられなかったことである。私の教師の不満は増大し、結果としてしばしば罰せられた。こんな全ての境遇から抜け出たいという私の希望は、一層強くなり、休暇で帰ったとき私は母に泣きながら、ルードルシュタットには返さないでくれと頼んだ。私の正直な告白以上に、私の実際は相当に明瞭になった。幸いなことは、母が、私が全く監視や指導なしに町に長くいると、だめになってしまうだろうと思ったことと、少し前に叔父のフリードリッヒがやって来て、教育舎をつくるという彼の意図が、私がギムナジウムを辞めたとしてその後の教育をどうするのかという問題をも取り去ってくれたことである。叔父の事業は私にとっては相当な救い場に見えた。そこで、以前の劇場床屋や劇場プリンセスとの交際における享楽期の有害な影響が除去されるにちがいはなかった。

私は、そのような子ども時代から、教訓を引き出しながら、二つの点に関してルソーを、つまり劇場の大きな敵対者であり、自然への回帰の偉大な促進者であるルソーを考察しなければならない。フリードリッヒ・フレーベルはペスタロッチの後継者であり、ペスタロッチはルソーの後継者である。また、シラーと人類の美的教育を、終にはリハルト・ワーグナーと、ある意味では劇場を教会にしようとした彼の努力に、私の思考は向けら

れる。私は、劇場が若者と殊に国民の中間層の教育に与える悪影響をたくさん見てきたので、劇場の教育的な陶冶的影響の倫理的価値については非常に懐疑的である。若者の性格が急に悪化する様々な状況を私はみてきたが、その責任を劇場は負ってきた。だが、たとえば不道德な脚本には責任はなかった。私はミュンヘンで、一人の若者を雇った。彼は、「魔笛」で無邪気な気取り屋さんを演じるまでは、品行方正で有為だった。そして、多分、共演することが、観ていることよりもハラハラドキドキのようなとき、すでに観劇場から生活に入り込んだ劇場らしい好みは厄介なものである。それは、個々の人間や国民全体の性格に非常に有害なことを引き起こす。未経験の心情や防御されず訓練されていない幻想を、みせかけの輝きの影響に捧げることは、そのみせかけの輝きが現実を不鮮明なものにし、現実の責務を回避し、現実の要求を担わないようにするだけに、危険だ。そして、危険と出会うべく、現実の強固な重みがやってくるのである。シラーはみせかけの美を倫理的で美的な原則にしようとして模索したが、彼はその理論の過ちに対して、つまり、実際の結末がただ悪くしかかなりえなかったその理論上の過ちに責任がある。私たちにとって必要なことは、みせかけの美ではなく、現実の美である。現実の美の確立のなかに、全ての人間活動がその目標を見出すのである。芸術は、それ故とくに劇場には、ルソーが理解しなかった高度な課題が帰せられるのである。また、リハルト・ワーグナーの努力、つまり、高貴な国民生活という美的現実において劇場にその地位にあてがおうとした努力は、正しく称賛に値する。ただし、みせかけの美ではなく、美的になることを必要とする現実が問題であるということが忘れられないかぎりだ。

おっと、この先走った省察から12歳の私に返ろう。その頃、私は幸いなことにルソーの影響で、劇場によって害された私の小さな魂のバランスを回復したのだ。

ちょうど、その当時、その設立において関係した産声をあげたフリードリッヒ・フレーベルの教育舎は、私から不真面目な劇場いりびたりの印象を、内幕の前後に追いやるのに役立った。それは叔父のシステムに理由があるだけでなく、経済的な状況にも負っているのだが、そんななかで叔父は、自らの改革派の信仰や聖書主義的な信仰以外の何ものによっても飾りたてることなく、人格、社会、国家におけるドイツ民族の改革を目指す活動を始めようとした。だから彼の生徒は、こんにちの普通の教育ではほとんど知られていないような自然との交わりのなかに据えられた。根本的には、この学校はその居場所を田舎にもつべきであり、都市的生活の進入からは保護されねばならなかった。都市的生活に対する不快が非常に大きかったので、私たちは毎年、教師の指導下で生徒たちによって企画された遠足では、あたかも都市ではペストが襲ってくるように、出来るかぎり都市を避け

ていた。さらに根本的なことは、この学校が小さな農地を管理していたことである。この農地は、義弟の教育目的に感激した私の母が、事業のために、シュタット＝イルムの土地を売却して得たわずかな現金でカイルハウ村で購入したものであり、生徒たちは農作業に参加させられたのである。気分転換でもあるこの作業は、教室の作業とならんで、私たちにふつう、例外なく恩恵を施した。干し草収穫、ジャガイモ収穫、果実の収穫などの仕事は、休日か、計画的に休日の日に振り分けられたが、私たちににとってはお祭りのように思えた。苔やもみの葉が牛小屋のしとねとして運び込まれたとき、森は私たちの有益な活動の舞台となった。私たちはこの作業を大変気に入っていた。その際に、森の植物や動物を知り、観察し、大小の鳥の巣を発見した。でも、あるとき大鷹のひなや、別のときにワシミズクの雛を家に持ちかえって育てただけで、ふざけて巣を壊したことは一度もない。そもそも私たちのなかで、森のロマンティックが生じており、その魔術はながく私を魅了した。後に、沢山になった生徒が、様々な楽器を練習したとき、私はフレンチホルンを選んだ。一人の同級生と私の趣味を分けた。私たちはフレンチホルンでデュエットした。私たちはしばしば近くの森のいろんな丘の上ののぼり、小さな谷にファンファーレを鳴り響かせた。でもカイルハウ学園の当初は、設立者にあらゆる資金が不足していただけでなく、私の母の資金も使い尽されたが、彼女は残った家財のすべてを喜んで売り払い、必要な金を準備した。だから、たびたび経済的な困窮が教育原則になったが、それに抗言できなかった。でも幸いなことに、当時はまだ、生徒はつねに血縁の子どもか親密な交友関係にある家族の子どもたちだったので、私たちが一生懸命農作業することに反対はなかった。私は、原則とは関係なしに、学園の経済的困窮から、牛たちを牧場へと追い立てねばならなかったときでも、自然を享受する気持ちは減らなかった。だからそう—朝日や夕日には森のはずれに立って、恍惚となって空想に耽った。または、植物学の勉強をやることになるが植物を集めて家に持ちかえったり、鳥や昆虫の生活を観察したりした。

遊びでも私たちは、夏や冬でも、自由な自然のなかで楽しんだ。私たちは森や岩肌に秘密基地をつくった。そして時々私は、岩肌の下にある苔床をもつ隠れ家で、30分か一時間かそこら空想に耽っていた。訓練された体操者のように私たちに、森の木で登れないものはなかった。私は覚えているが、我が愚連隊がリスを木から木へと森から追い出したように、とうとう最後の隠れ家を捨てるように強制され、最後には手で大地をつかんだことを。また、私たちの多くは、弓や矢の正しい扱い方を知っており、弓矢の作り方では私はマイスターとってよかった。矢の先端は鉛で鑄合わせ、後部には羽を芸術的に付けた。私は弓の生木を火で曲げることを学び、クラ

シックな弓をつくった。ときには、このような原始的な狩猟具で小さな鳥を射ることに成功した。もっと器用なことに、私たちは、動物を生きたままうまく捕まえることができた。そして、学園の中心校舎の建設が金欠のため、ながい間、中断されていたにちがいがなかったときに、私たちは空き部屋を利用して、クリスマスにはもみの木で部屋を飾り、部屋にクリスマスツリーを一行に並べた。冬の残りの日々も私たちは大いに楽しんだ。

この学校時代の終わりごろ、私が19歳を終えるころ、最も幸運だったことは、一人での徒歩旅行が許されたことである。その徒歩旅行は休暇中に特別の配慮で認められたものであり、私の自然三昧は最も豊かな養分を得た。この旅行の間、私は周囲の急峻のなかの人が住まない谷底を通り抜けたり、岩山をよじ登ったりした。

カイルハウ学園に在籍していた最後のころ、下に掲げるような詩をつくった（詩は省略—訳者—）。他にも方法はあったらうけど、詩で当時の心情と精神の状態をあらわした。このような気持ちのなかで私は1825年に学園を去った。そして、学園で習得した知識や技能だけで世の中に出ていこうとしていたのである。

このようにして、カイルハウの学園生活が—その精神や授業の方法も含まれているが—自然に対する感性を育み、汎神論的な禁欲にまで高めたのか、他方において前述したルードルシュタットの劇場通いが、すでに子ども時代に、芸術的な創作に対する感性を刺激したのか。だから、ルードルシュタットでの私の子ども時代の歴史に、カイルハウが続かなかつたなら、私は役者か—良かれ悪しかれ—劇作家となっていたらう。例えば、さっきの詩に、私の思想や感情がドラマチックに表現されていたように。あのかつてのルードルシュタット影響は、私の感じ方に、ユーモアの要素を与えた。少し後のことになるが、私の世界認識がもうシュバーペンランドやシュバルツバルトにまで広がってから、他の考え方や感じ方が出来上がるなかで、私は遍歴中の息子をある隠者のところへ立ち寄せさせた。その隠者は限られた牧歌的制限のなかでの満足の優位を息子にほめかした。彼は言う（詩は省略—訳者—）。

息子は遠くへの新たな憧れを爆発させながら答えた。でも、彼の熱狂は突然打ち破られた。帰宅途上の一群の手工業者が歌いながら通り過ぎながら、次のように歌う。

世の中なんてどこも同じ
貧者と富者だけだ
どこにだって幸福なんてありゃしない
だから家に帰るのさ

目下、カイルハウを去って、私はそもそも風景画家に

なっていたとしたら、絵の情緒のなかでは、私の肖像が欠けることはなかったろう。私の当時の教師の一人で、シェリングに家庭教師をしてもらっていた後に有名な化学者となる Schönbein は、ミュンヘンの芸術アカデミー長に私を推薦してあげようとしてくれた。このプランは経済的な資金が全くなかったので潰れた。私は1825年に世の中に出ることによって、生活費を自分で稼がねばならず、また、頼る術の無い私の母や妹をも考慮せねばならなかった。だから、ミュンヘンの芸術学生になるかもしれないというようなことは、諦めねばならなかった。

どのような知識や技術を私は身につけたかを、私は説明しよう。これらは違った人生行路で役立った。

2節 教育による世の中の改善という「一般ドイツ教育舎」の影響下で。フリードリッヒ・フレーベルの意図、活動、人格について。

私が19歳のときだが、私はカイルハウの私立学校にいた。その設立者は学園を理想高き名前「一般ドイツ教育舎」と名付けた。私が在籍していたときまでのそこの生活については、前の章ですでに何度か説明したが、この学校での教育が私に与えた影響について、私は、より一層詳しく説明し、考察するのが妥当だろう。フリードリッヒ・フレーベルの教育システムは、そもそもドイツ国民生活の主流が、その深部にこのシステムを取り入れようとしてから、以来、ドイツを越えて、その教育制度への影響を与えた。私が述べようとしたことは、ちょっとの間、関心をもってくれる読者の注目をひくことに有効だろう。このなかで、ドイツ国民の文化史の注目すべき部分が現れてくるのである。

「不運だ！君が教育を受けなくちゃいけないだなんて！」Reinhold Solger は、彼の若きヒーロー Hans von Katzenfringen に呼びかけた。いつでも重大な宿命なのは、教育理論は自らで試し、実験は自らでしなければならぬことだ。それにもかかわらず、残念なことに早世した才能ある風刺家のこの言葉は、私がフリードリッヒ・フレーベルの教育に多くの点で異論を申し立てようとするかぎり、私には関係しないと思う。他の学校で育ったなら、私は疑いもなく違う人生を送っていただろう。私は多分、何か違う狭い生活圏で成功を誇ることができただろう。でも成功したかどうかは別の問題で、それについてとやかく言うつもりはない。私たちは最後まで、成果を出す年齢までは、人生を教育的な実験にさらすことに甘んじなければならぬ。

フリードリッヒ・フレーベルの努力が、一般の注目を浴びたのは、彼の死後になってからであり、それはとくに幼稚園によってである。とにかく幼稚園はただ、次のような意図、目標、手段をもつ学校の第一階梯(最低部)となるものである。つまり、乳幼児から熟年までの人間

の教育の全てを包括することを求め、ドイツ国民に由来する、教育による人間変革以外の何ものをも、ほとんど計算しない学校である。その学校では、カイルハウ学園の精神が、生徒たちに息づいているが、カイルハウ学園の精神とは、人間は根底から現状とは違って変わらねばならず、その変革は教育を通じて可能だという信条である。この改革的な目的に沿う教育機構の計画において、幼稚園はフリードリッヒ・フレーベルの精神において自己成長した最後の機構である。フリードリッヒ・フレーベルが自らの経験を念頭に置いたことだが、それは、早い時期の教育がだめにしたことを、いかに後の教育が改善しようとしても、改善できないということである。だから彼は、生徒を常に乳幼児期から得ようと努めた。そしてとうとう、母親教育の必然性に迫られたが、それは周知のようにすでにペスタロッチが取り組んでいたことだった。

既述したようなその当時の文化的状況という制約にこのように帰っていくが、教育技術の過大評価や自惚れに対する厳しい批判が明瞭となる。それは全く忘れ去られたようだが、人類の教育は世界の歴史のなかで進展するのだということであり、教育者や職業教師はここには比較的制限された影響しか行使できないという批判である。子どもにとって良い教育は、良く教育された両親や教師を前提としており、また、良き両親や教師というのも良き教育を前提としているのである。だからそのように、アダムとイブやエデンの園の不幸のリングまでさかのぼることになるのだけど、人はなかなかそんなことを理解しそうもないし、学校親方も他の人よりも早く理解しそうにもない—でも、最近の生物学上の仮説によれば—ゴリラやその祖先にまでさかのぼることになるのかしら。でも、さすがにゴリラからは教育による人間創造はないが。だから、教育技術の過大評価はフリードリッヒ・フレーベルと彼の教育使徒たちの努力における最大の誤謬なのである。—この誤謬は、私たちの時代の民主的な平等欲求と最も密接な関係にある。もし、生まれつきの家柄や能力の違い、および、社会階層の差別化を排除できると考えるなら、精神的能力の不平等は憎むべき事実として残る。この精神的能力の不平等は、ちょっとの間は排除できても、ここからは常に新たな差別が生じてくるに違いなかったから。それ故、この民主的な平等制というのは、精神的能力の差別性は教育上の罪の結果にすぎず、だから、平等を目指す、よりよい教育技術であるなら、この罪を排除できるのに違いなく、否、人種的に最も劣る人間でさえ、最も優秀な人種と一緒に平等な陶冶段階にまで高めることができるに違いなくとする見解なくしてはありえない。それは、その時代の最も大きな誤謬であり、実際の批判にさらされることを望まない信仰である。そのような信仰は、文化の進歩というのは、組織体の系譜的な先進的変革によるという近年に獲得さ

れた認識（優生思想か？—訳者—）によって根拠を失った。だが、その一方で、この広く一般的で、中身の多い関係において、教育活動は次の世代形成への意図的共演者として、高度に卓越した倫理的＝生理学的意義を獲得した。そして私たちは、教育活動をこの意味において理解している人間を評価せねばならない。フリードリッヒ・フレーベルはこのような人間だ。彼は、当時、教育による人類の発展という思想にまで高まっていたが、当時は、このような思想はまだ、支配層に意識にはなく、その思想も今日のようなリアルな内容をほとんどもっていなかった。

幼稚園は、全くこの男の見解にそった教育システムとして、みんなの好意を得ていたことは明白である。一見すると奇異にうつるかもしれないが、ドイツの反動的な国家権力は、カイルハウ学園の活動は差し支えなしにしていたのに、一方で幼稚園を10年間プロイセンで禁止していた。幼稚園は、あまりに罪のない、あまりに無害な乳幼児を相手としていることから、幼稚園には国家や教会や社会にとって危険が隠されている可能性があったと、人は考えたかもしれない。フリードリッヒ・フレーベルの教育目的は非常に深く考慮されていたが、それでも反動的な雰囲気や少しも汚さないとする鋭敏な嗅覚をもつものが、このラジカルで改革的な教育システムの最初の出発点に、保守派にとって非常に危険な発生源を嗅ぎつけることは、決して不当なことではなかった。プロイセン文化相フォン・ラウマーの誤解：フリードリッヒ・フレーベルは私の弟 Karl や、私によって書かれた本の執筆者だ—が幼稚園禁止の口実になったことは、重要ではない。なぜなら、ラウマーは、枢密顧問官が彼の誤解を指摘した後でさえ、禁止令に固執した。そして、禁止令の中止が実現されるよりも前では、雑誌「Kladderadatsch」がはじめて幼稚園を擁護したに違いなかった。この雑誌は、この施設をまず最初に社会の反対派に注目させ、そして良い印象を与えることに貢献した。反対派にとっては、教育は、反動的政府にとってと同様に、党派活動にとって重要だった。それからすぐ、この施設は、イギリス、アメリカ、イタリア、ロシア、そして他の国々へと移植された。それらの国々では、政府はまだ教育による革新に恐怖をもっていなかった。そして今日、私が独り立ちしてからほぼ70年たつてはじめて、合衆国のはるか南西にある、文化史に貢献しようというある団体—テキサスのダラスの Trinity 社会学会—から、有名人の直筆を集めるために、フリードリッヒ・フレーベルの手書き草稿を得たいという希望が来ている。

全く反対に、カイルハウ教育舎では、普通の人にとっては、魅力的というよりは癪にさわるようなかたちで、ブルシェンシャフトの活動やそのセクト主義との関係が現れてきた。ブルシェンシャフトのリーダーたちはしば

しば私たちのところにやってきた。私たちの生活習慣は、徹底的に私たちを普通の生活から切り離す特徴をもっていた。そして私たちは「普通の人」を軽蔑するか、同情することをしっかりと学んだ。私たちすべては—生徒も教師も、男も女も—「Du」と呼びあった。教師と生徒はいわゆる古いドイツ服を着て、髪をながく伸ばし、当時はひんしゆくもので、やくざ者 (Verbrecher) のように首もとを裸にしていた。私たちは体操を宗教のように行った。私たちの食事はゲルマニア太古の食物採取に近かった。堅いナシと黒パンと水の朝食は、真冬でも続き、私たちを脆弱にはしなかった。そして、新入りが私たちの食事に満足を示さなかったとき、墮落した家庭の甘やかされた息子たちが—そう私たちは見なしたが—私たちから情け容赦の無い嘲笑を浴びるのは確実だった。甘ったれ者の模範的な話し方も私たちは嘲った。贅沢な生活にことさらにめり込んでいたある紳士が、近隣の村から、息子と一緒に学園にやってきて、場合によっては息子を私たちのところに預けようとした。でも私たちの粗末な食事や村の清らかな水（だけしか飲むものがない—訳者—）を知って彼は考えをやめた。そして私たちは彼が、子どもと馬車に乗って引き返しながらか、次のように叫ぶのを聞いた。「カールちゃん、ここはお前には向かない！コーヒーも、ワインも、ポンチも、司祭もないなんて！」。この言葉のために、私たちの食事を小馬鹿にしたすべての新入りは、彼が食事に満足を示すまで、ながく迫害されることになった。私たちはコーヒーを全く嫌悪していた。私の叔父がベルリン女と結婚して、彼女が「素晴らしい休日に」私たちの体操場でコーヒーを飲むという改革を実施しようとしたとき、文字通りの反乱が起こり、私たちは「侮辱された体操場にあるコーヒーハウス」というレッテルのついた板を入口に取り付けた。散歩や遠足では、私たちは自由の歌、戦いの歌、ドイツの王侯を嘲笑する歌を歌った。その際、隊列に、例えば「人民よ立て、嵐よ起これ」の声が起これば、それから「くたばれこの野郎、暖炉に隠れやがって、太鼓持ちめ、腰巾着どもめ、お前たちは破廉恥で憐れなブタ野郎だ」と罵りの声が起こった。こうすることによって私たちは、左翼（セクト）の誇りを育んだ。—要するに、この学園は、その最も大きな教育成果ということでは、そんな評価は誰も問題にしていなかったが、当時の革命的精神の温床であり、左派党派の目的に役立ったのである。この党派は、私たちの国民の発展のために最大の功績があったことで、常に、左翼（セクト）の名前を得ていた。学校のこのような特徴から、学校が党派以外の一般からは何らの好意も受けなかったのは当然である。だが、それだけに一層、注目すべきは、ドイツ政府が私たちをそのまま許容したことである。たぶんそれは、密告する者がいなかったし、ルードルシュタット政府が、私たちは彼らと親しかったが、私たちに対して高

度に政治的に動く必要性を感じていなかっただろう。私は、私たちの小さな世界を襲った政治的迫害については何も覚えていない—政治的迫害とみなせるといえば、ある自分たちで企画した遠足のおり、オーストリア警察が私たちに対して、ボヘミア国境を越えなければ、すでに長くのびた私たちの髪を切れといったことだったり、あるいは、同じような遠足で、エールフルトのドーム広場を数人の学友と横切ろうとしたとき、一人のプロイセンの下士官が、通りすがりに私の頭髪を掴んで、私に面と向かって「髪を切れ、みっともない格好をするな」と言ったことだ—この侮辱は、私にプロイセン王国に対して、長く培っていく特別の敵意の土台となった。

フリードリッヒ・フレーベルの教育学の根本思想は次の三つの原則に要約される。1：精神と肉体の高度な形成を達成することは、全体にとっても個々人にとっても至上の責務である。2：この形成のための内容、形式、方法は、全て人間に共通な人間の本質によって必然的に規定される。そしてそのなかでは、いかなる恣意も許されない。3：この本質によって規定される方法は、体験（Tun）から生じ、体験によって理論に導かれ、理論はより高度な体験へとフィードバックされねばならない。—この根本思想に相応して、カイルハウ学園では、生徒を特定の職業や社会的地位に向けて教育することや、誤った欲求や活動衝動を一面的に方向付けることは論外だった。私たちは、ただ「人間に」教育されねばならなかった。そして、人間の本性の認識から、何がそのために必要かが明らかになるとされていた。「内から外への全面的な発達」は教育上のスローガンだったが、私は幾度となく叔父や彼の弟子の口から聞かされた。しかし、かかる発達を引き起こしたり、促したりするためには—教育はそれ以上すべきではないので—自然に相応した方法が重要となるにちがいがなかった。この方法は学園ではただ「Gang」（道なり／合自然）と呼ばれた。フリードリッヒ・フレーベルが1821年に、ルードルシュタットで出版した小論にある彼の言葉によれば、教育と教授の仕事は意識的に「人類の発展における神の道なり（合自然）」に続かねばならない—神の道なり（合自然）、人間の本質と神の道なり（合自然）が一致していることは自ら明らかになる。そのことからフリードリッヒ・フレーベルは結論を導いた。「全ての教育、教授、陶冶の対象は、必然性によって規定される。そして、その数や順序について、また、その取り扱いについても、恣意は許されない」。教育の完全性は、こうして、（フレーベルの—訳者—）システムの二番目の大きな誤謬だった。だが、同時に、ここから三番目の誤謬、つまり全ての人に平等な教育を求めることからくる誤謬が続く。

個々人は人類全体の生活において特定の仕事に就かねばならないが、その仕事は個々人にとっては多かれ少なかれ宿命によって鋭く定められている。教育は個人をこ

の仕事に熟達させねばならない。人間生活においては、個々人はある職業をもつ、だから、—可能な場合のみ—個々の人間には、全ての人間に共通な教育よりはむしろ、他の教育をあてがうような要求が据えられなければならない。ただ一つの課題は、万人のための教育を取り消さねばならないことであるが、この課題は私たちの時代にはほとんど全く忘れ去られている。個々人は、個々人の内外にある粗野な本性との闘いにおける文化の戦士である。そして、かかる戦士として個々人はみずからの修行や必要な規律を学ばねばならない。さらに、個々人は特定の職業や特定の社会的地位のために—さらに言えば、特定の武器のために—有能であることが必要だ。だから、社会が個人に要求することは、その小さな身体のなかに可能な限り完全な「男（あるいは女）の小宇宙」を表現することではない。そんな人は最も役に立たない人なのだ。あるいはまた、Hans von Bülowのようなピアニストで詩人で作曲家がいることを、ダーウィンのような自然科学者がいることを、そうしたことを、誰が偉大な政治家に感謝すべきだということのか？それでは他に何が優秀な人間でありうるということのか？—人間の目標が達成されるのは、各人が、そのあてがわれた地位で、あてがわれた職責を果たすことによるのだ。各人がその職責に就くのは運命だったり、内からなる衝動だったりするが。この場合、一般的な人間の品位や、道徳的な自由が犠牲になることは問題にならない。むしろ逆だ。自らの職責を完遂し、職業に没頭できるように人間を高めること—このことが、教育によって要求されねばならないことなのである。自惚れを拡大するのではなく、自己自制を教育は教えねばならないのである。

フリードリッヒ・フレーベルは抽象的な意味では、そのことに対立していない。反対に、自己犠牲が最高の理想と讃えられるキリスト教主義においてフリードリッヒは、高度な人間の個性教育の方法を知っていた。だが、彼のシステムの小宇宙的な個人主義はそれと完全に対立している。彼のシステムの文化史的意義は、イエズス会的教育に鋭く対立したことのみにある。このイエズス会的教育は、生徒の独自の精神的生活をシステムチックに殺そうとするものであり、そうすることによって厳しい試練に耐えてきた少数者が多数者を意のままに操れるようにするものである。彼らは、イエズス会的な試練を行う学校を通じて精神的な屍になることはなく、自らを支配層と意識するようになるとされた。フリードリッヒ・フレーベルは、みんな平等に全面的に教育された人々による社会を理想としたが、ただ、彼の教育的個人主義には、反対の誤りに迷い込んだ教育論がある。というのも、たとえローマカトリックでなくとも、私たちは理想的人間を戦う教会において認めるものであり、私たちはみなその戦士である。このヒューマニスティックな権威主義的原則の基礎付けにとって、その古い基盤は消え失せた

が、私たちの時代に明らかに欠けているのは、いかにして、全く近代的な立法を効果的な方法で説明するかという理解である。そして、軍役のみが、それなくしては社会組織が存続しえない服従や規律の伝統を守るのである。だから、来るべき市民社会の形成は、軍隊的組織の形態に基づくことは一層明瞭である。—いわゆる武力を伴う社会的活動を通じて世界は、成果を見いだすのである。

社会主義においては、その最終目標となる自由と平等の衝動が、政治的軍事的絶対主義へと転化しなければならないのとまったく同様に、精神的倫理的自由の建設を見込む個人主義的教育システムからは、教育の絶対主義が生じた。この教育絶対主義は、この頃のローマ法王の教会絶対主義のように、教育の完全性を広く主張するものであった。その「合自然（Gang）」は、何を私たちは学ぶべきか、どのように学ぶべきかを、熱心に必然性をもとめて示した。「合自然」において欠陥のある人は、欠陥人間であり、その人間の本質は自らに欠損をもったのである。数学習、楽式論、音声学、言語学、音型論や楽曲論において、常に、与えられた諸条件や認められる原理・原則に応じて、単純なものから複雑なものへ—精神と肉体の教育の全ての領域で—「合自然」は全く完璧に遂行されねばならなかった。18歳か19歳ではじめて学園に入園した青年が、一週間の間、夜遅くまで、感嘆するぐらいの頑固さで「合自然」を音型論において取り戻すのを私はみた。彼は牛飼にまでなったし、それから、尊敬すべき牧師になった。—垂直線から、水平線から、十字線から、斜線から、斜線と十字線からなど—音型論の「合自然」を彼は、牧師になるためではなくて、完全な欠陥のない「人間」になるためにやり遂げなければならなかった。だが、「合自然」においては、身体訓練において個々の指の一つ一つの関節が独立して動けるような完全性も求められた。私たちのなかでユーモアある連中が—そういった連中が欠けることはなかったが—時々シビアーに、真面目に続けたのだが、一列に並んで立ち、「イッチニ、イッチニ」の掛け声で、他の指を動かさずに、小指を一定に運動させねばならなかったのである。私は、このようにして、全ての指の全ての関節が、他の全ての指や関節から独立して動けるまでになった。でも私は手品師の素質を持ち合わせていなかったもので、獲得した技術も生活ではなんの役にも立たず、年とともに忘れてしまった。ちなみに冬に、華氏17度か18度（-7℃~-8℃ぐらい—訳者—）という温度になれば、指運動は何かしらの不愉快なものだが、まあ、体調がちょうど良く、私たちがそのような温度でも体操に相応しいシャツ姿をしていたら、私たちのなかの皮肉屋さんが、隣のやつにささやいたものだった。「動けよ、そうすれば温かくなるよ！」

「合自然」に応じた合法的な発達という考えは、メ

トーデ（教授方法）でもって私たちを厳格に支配した。メトーデは、思考するよりもまえに活動を、認識するよりもまえに表現を、意図するよりもまえに創作を、そして教育はそれらに応じて行わなければならないという既に示唆され、一般的には間違っていないとする認識に基づいていたので、私たちのなかで次のような信仰が生じたに違いなかったことは理解できる。つまり、私たち自身の活動に起因するメトーデは—それ故、「合自然」は—これのみが、私たちを全ての真実へと導くことができるのだ。「合自然」は私たちにとっては言わば、自ら自身を通じてはじめて方法的に確信されるべき精神そのものであった—つまり、ミュンヘン大学の昔の教授が渦巻き線から世界の発生を想像したような方法で。

有識者に対して私は、この教育システムと当時の一般的な哲学理念との間にあった関係について言及する必要はない。私たちの学園では、当然の結果として、発見は、本当に驚きが期待される根本的な教育手段となった。この教育手段が精神の方向付けや人格形成にいかなる影響をもったかは明白である。それはアメリカン精神に似た文化現象だった。つまり、アメリカと同じように、理論と実践を前提とし、伝統とは決別し、個々人のイニシアティブによってラジカルな大胆さをもって、不確かなことを確かにする、こんな文化現象だ。さて、教育的な奇跡を期待して振る舞うことは、他の奇跡を期待して振る舞うことよりもベターではないことは明白だ。試行錯誤が首尾よくうまくいくというのなら、試行錯誤は最善の行為に違いない。しかし、例えば、生徒たちが、ギリシャ語を発見することを要求されたとしよう。試行錯誤の試みは、ユートピアそのものを目標とするように、悲惨な結末を迎えるにちがいない。私は、はじめてのギリシャ語の時間を特にはっきりと覚えている。先生は、哲学の教養をもった真面目で優秀な人だったが、「合自然」の完全性のために、自らの分別を犠牲にした。彼はユーモアでもって拒絶すべきことを、迷信的な期待でもって試みた。彼はゆっくりと明瞭にギリシャ語を読み上げた。びっくりするような声と怒ったような態度で彼は最初のギリシャ語の単語を繰り返して—そして尋ねた—どういう意味ですか？

この最初の授業がどうすすんだかについては、詳しく説明するまでもないだろう。それで私は発見的なメトーデに重大な過ちを認めるであろう。たとえ私か、個々のもっと粗雑な錯誤にも、発見的なメトーデの価値を認らなければならないとしてもだ。数学的、美的理解の育成において、ならびに自立的思考や熟練技能の能力をつけさせることにおいて、発見的なメトーデは驚くほどの成果を生み出すことができる。だが、発見的なメトーデは、常に例外に属す豊かで強力な素質をもった自立的な個々人の発達を、中や下の能力しかない多数派よりも目算しており、発見的なメトーデは、一般的に用いられる場合でも、

自らの活動をある特定の職業に集中させることのできる人間をつくるよりも、ほとんど役に立たない好事家を育てたり、あつかましく騒動を引き起こす者を生み出すものだ。古いスコラ哲学的な教授や教育のメトデーによる機械的な訓練とは反対に、発見的なメトデーは計り知れない進歩を表しているし、発見的なメトデーに対してなされうる異議は、思慮分別のない一般化、間違っ場所での適用、用い方の不適切な場合においてだけだ。だが、発見的なメトデーがいかに当時の時代の潮流に相応していたかは、違う領域であっても、様々な実例で示される。生徒の一人が、入園後しばらくして、発見的なメトデーにまだ精通していなかったとき、ある課題をやるように言われたが、彼は課題を拒否して次のように言った。

「父が、僕はここではただ思索することだけを学べばいいと言ったんだ」。この父は、プロイセン内閣の枢密顧問官だった。だから、当時、聡明な人間を前提としうるような社会的集団には、このような父親がいたのだ。

フレーベルのシステムの絶対性は、ともかく、理論とメトデーにおいて具体化しただけではなかった。それはフリードリッヒ・フレーベルその人においても具現化した。私の学園生活の終わりごろ、ある一人の先生が辞めたがったとき、叔父は、いつもの早朝礼拝に集まった教師と生徒たちの前で、遠慮会釈なく問題をもちだした。「私の今までの友人で同僚たちよ、お前達の先生 L (おそらく「ランゲタル」だろう - 記者-) は…私たちが去ろうとしている」と彼は私たちに訴えた。「彼には、教職を有能ならしめる我慢の能力がないのだ」と、集まった生徒や他の教師の前で言葉が続いたが、それは驚きあがる彼を深く傷つけたにちがいがなかった。私たちは、息を殺して、L が…発言するのを聞いた。彼は言った。「違います。私に我慢の能力が欠けているからではなくて、あんたのせいなんだ」と私の叔父に向かって「あんたは人間愛から、私たちがともにやってきた仕事をやったんじゃない、おそらく、あんたを駆り立てた自己愛から仕事をやってきたんだ。だから、私はあんたのところを去るのだ」。それに対するフリードリッヒ・フレーベルの返答およびその返答によって L 先生に生じた影響は注目に値する。「君は - 大審問官の声で、フリードリッヒ・フレーベルは L 先生に行った - 君は、神が君に命じた責務に対して背きたいんだね! - 君を罰している苔にキスしろ。君には、物事を判断できる能力なんか一切ない」。

このやりとりが、生徒と教師に与えた印象は、深くて様々な意味をもった。私に関しては、L 先生が…ワッと泣き出して - そして - 止まったとき、私の全身は激怒していた。

私は、このシーンからなお、どのくらい学園にいたのか、もはや正確には覚えていない。確かなことは、これによって私には、チャンスがあり次第、学園を去ろうと

いう決心がついたことだ。このチャンスを私はねらっていた。そのときまで、自明のこととされていたのは、私は十分な大学教育を受けたのち、教師として戻ってくることだった - そのための資金をどこから得るかは、やっかいだがまだ問題化していなかった。このような事件があったのち、はっきりしたのは、私はそれを出来ないし、望まないということだった。派閥の精神や、叔父がこの事件で表面に出したポスト (Großmeister) としての地位は、私に敵意を抱かせた。このような精神がどれくらい強く、フリードリッヒ・フレーベルのなかで次第に成長したかは、次のことから明らかである。つまり、私と私の兄弟が去ってから、フリードリッヒ・フレーベルは、他に理由もなしに背教者のように私たちを取り扱い、全ての交際を断つことを当然とみなしたことである。私が他国から初めて彼に送った手紙を、彼は開封せずに送り返し、私の兄弟たちにも、フレーベルは彼に送られた手紙を未開封のまま火にくべることを通告した。後年、彼は柔軟になったが、1847年にはじめて、私は、当時私が出版した著作を寄贈したことに対する返礼を記した数行の友好的な手紙を受け取っただけだ。私の方も、この寄贈は22年経って、彼に私の感謝の思いを示すはじめての試みだった。そしてこれが、私が彼と再会した交際のなかで唯一のものとなっている。それまでにも、1833年に、ルードルシュタットの国境警察で偶然彼と出会ったことがあった。二人ともスイス側へ査証を提示しようとしていたところだった - 彼は、カイルハウ学園を他者に渡して、スイスで彼の精神にかなう第二の学園を建設するためだったし - 私は、チューリッヒで教職に就くためだった。私たちは互いに見合ったが、何も話さなかった。彼は、私がカイルハウを見捨てたという理由そのもので、私を憎んでいた。私は彼の目には背教者に写った。

フリードリッヒ・フレーベルは、当時の最も注目すべき人間の一人である。彼の表現は独特のものだった。もっとも、その表現には、当時のドイツ国民生活における精神性の重要な代弁者という典型が普通に現れていたとしてもだ。彼の胸像写真があるが、誰彼と認めることができる多くの知識人のなかでは、彼は、その写真の人物は誰か、誰だったかと問わなくてもよいような一人とはならない。彼はそう見えた。真ん中から分けて、肩までまっすぐに撫でた髪をもつ頭は、何かしら聖職者のようだった。横顔は大変均整がとれており、非常にアンチークで、表情は厳粛でピューリタンのだった。私が子ども時代にはじめて彼に会ったとき、彼はあらゆる他の人と違ってみえた。学園では彼は、ほとんど高貴な存在とみなされていた。教育者としての彼の天分は素晴らしく、違う時代に、違う人々のなかでいたなら、多分、教祖になっていただろう。全ての年齢の青年を刺激的で魅力的な仕事に導くことにおいて彼は、疲れを知らなかった。そのことから、学園では無気力や無関心は未知のことだった。

また、躰の悪いふやけた青年たちが、気まぐれに、教育上の季節的な温泉治療場へ来るかのように、私たちのところへやってきたが、彼らも、短期の滞在の後には、力強く、はつらつとした、活気ある生活の精神全般にとらわれ、精神と肉体の不断なる活動ゆえに、不作法がなくなったのである。60人以上いた学友のなかで、この治療が少しの効果もなかったという生徒を、私はたった一人しか覚えていない。必要な場合、天才教育者の言葉は、他の罰則を必要としないぐらいに、充分酷烈だった。彼の親しい友人や同僚にとって、彼はマイスターであり、弟子たちは彼の信奉者であり、彼の言葉は弟子たちにとって福音だった。後に外部からやって来た幾人かの教師、すなわち、著名な化学者で後のバーゼル市民 Schönbein 教授と、スイスの歴史家で、後にイェナ大学やベルン大学で教授となる Karl Herzog たちのみが、批判の自由を主張した。ある日、フリードリッヒ・フレーベルが、Schönbein に対して、喫煙の習慣を止める意志力を十分にもたないことを批判したとき、彼は言い返した。「君は間違っている—私は禁煙できるが、禁煙をしたくないだけだ—」。このような人達は、でも、学園にほんの少しいて尽力しただけだった。そして、この有名な両者も、私の脱退を促した。

私自身の将来を考えれば、母や姉の経済状況および叔父と Schönbein の関係からして、出奔を延期できなくなった。

学園があったカイルハウの小さな農場は、既に述べたように、母によって購入されたが、その際、母が学園の農業や家事を指導することが取り決められていた。だが、理由が無いわけではないが、彼女はしばらくして、彼女と全ての事業の経済的破滅を予見したにちがいがなかった。自らの努力の成功を盲目的に信じていたため、フリードリッヒ・フレーベルはあらゆる経済的苦慮を度外視していた。非難しても無駄だった。そして、ある日、種もみを学園のパンをつくるために脱穀したとき、対立は決定的となり、母は農地を義弟に売り、カイルハウを去って、ルードルシュタット近郊の田舎町で、私の姉と一緒に農家に間借りした—私ははっきり覚えているが、年に家賃12ターラーだった—。農地売却の代金は叔父の有るとき払いということだった。彼は、私と私の二人の兄弟を学園で無償で教育する責務を負っていた。支払金額は大変些少なのに、支払いは滞りがちで、そのため生活必需品もほとんど買えないぐらいだったのに、ましてや母と姉妹が、自分たちを養うために事業をはじめなんてとんでもないことだった。だから小さな私財は徐々になくなっていったが、他の救済策は取られなかった。こんなことから、田舎町の農家の二部屋にはひどい困窮がたびたび降りかかった。ある厳しい冬、20度位か（-6~7℃—訳者—）、私はひどい熱で臥せっている母のお見舞いに行ったが、彼女には金も燃料もなかった。そ

れなのにフリードリッヒ・フレーベルは、彼に支払う義務のある支払いを、母のために払って欲しいという私の願いを激しい言葉で拒絶した。そのときまで私は、愛する母と、尊敬する教育者である叔父との間にあって、ただ、ひどく矛盾した感情のなかで揺れ動いていた。今や、私はこの男を憎みはじめた。そして、当然ながらカイルハウに留まることができなくなった。私は兄弟と冬の夜に厚紙細工を制作し、小遣い金をたくさんもっていた若干の級友たちに贈り物として買わせた。私たちの姉はお金を得るために裁縫をした。これらの二つの産業の僅かな収入によって、世間体をつくろうぐらいの僅かな家計が賄えた。母は、ルードルシュタット近郊では名声を得ていた。そして私の姉は、私たちに友好的な家族の若い婦人たちと交際していた。それだけに、多くの点で、困窮は重苦しく感じられた。このような境遇から、兄弟のなかで最年長である私に対して、シビアーな請求が生じた。また、二人の弟たちの退校も考慮されたが、その実行はさしあたり後回しになった。もし、フリードリッヒ・フレーベルの伝記のなかで、私たち兄弟の恩知らずが責められたなら、私の説明によって、その非難は彼の方に本当の原因が帰せられるであろう。

プロイセン退役中尉 E.H. Michaelis—彼は、その才能を国家によって一大測地事業へと活用され、また、フンボルトによっても、地図製作にあたり、彼の探検のために活用されたが、むら気から退役し、ギリシャ愛好家としてギリシャに行こうとしたが、マルセーユで考えが変わり—カイルハウへ、ちょっとのつもりで寄ったときに、学園の精神に魅せられ、数学の教師として私たちのところに留まった。彼は、私たちに測量を教えるために必要な道具を自分自身で所有していた。そして、私たちの谷の小さな地形図を作製するために、私たちに測量させた。その際、私は地形図製図において不器用でないことが分かった。Michaelis はまた、石版の印刷機を所有しており、彼はそれをギリシャで使用するつもりだった。私は彼の指導で、地図学用の石版術を試みた。彼の私たちのところでの滞在はそう長くはなく、彼はそれから、ゴータの出版社のために、Vohnenberger や Ammann によってずっと以前に始められた古いシュベベン地方の地形図作製の継続作業を引き受けた。

Schönbein や侯爵の勧めに応じて私は、そこで、彼に頼り、手紙で自らの境遇を語り、助手に雇って欲いかどうかを尋ねた。私は OK の返事もらい、叔父に覚悟して、決心を知らせた。私は、「かつてに行け」という冷やかな言葉でもって学園を去り、春のある日、シュツットガルトへの徒歩旅行をはじめた。

（解説）

本稿は、フリードリッヒ・フレーベルの甥ユリウス・フレーベル（1805~1893）が1890年85歳のときに記した自

伝 Ein Lebenslauf, Aufzeichnungen, Erinnerungen und Bekenntnisse, Bd. 1, Stuttgart (フンボルト大学図書館所蔵)のうち、誕生からカイルハウ学園を去った1825年までの記憶を邦訳したものである。ユリウスの略歴とフリードリヒ・フレーベルやカイルハウ学園の思い出については、拙稿「ユリウス・フレーベルからみたカイルハウ学園と叔父フリードリヒ・フレーベル」(『福岡大学人文論叢』30巻2号1998)において論じたので参照していただきたい。

拙稿と重複するがユリウスの略歴を簡単に述べる。ユリウスはフリードリヒ・フレーベルの次兄クリストフの長男として生まれる。9歳のとき牧師だった父が急逝するが、ギムナジウムの特待生となり篤志家に支援される。本文でも述べられているが、ギムナジウム時代のユリウスは、今流に言えば不良学生。結果的にギムナジウムにおられなくなって発足時のカイルハウ学園で学ぶ。同学園の様子をユリウスは晩年になって振り返るが、同学園はギムナジウムらしからぬ野放図で開放的で、それだけに当時の革命家の教師が入り浸っていたという。急進的の学生運動ブルシェンシャフトが信奉したヤーンの体操が宗教のように扱われ、対ナポレオン祖国解放戦争の雰囲気満ちていたとユリウスは回想している。

同園ではバスタロッチに倣って、万人平等の教育と合自然的なメトデーが行われ、暗記主義が忌避され、自由な思考が尊重された。このことは、後の三月革命期でドイツジャコバン派に所属したユリウスの基礎を形成していった。

叔父フレーベルとなかば喧嘩別れするようにしてカイ

ルハウ学園を飛び出したユリウスは、その後、測量技師の助手をして、ミュンヘン大学やイエナ大学、ベルリン大学で学び、チューリヒ大学の教授となる。彼はその自由主義的精神から社会主義に目覚めるようになって、民主主義的な出版活動を行い、エンゲルスやフォイエルバッハなどの著作も刊行した。

三月革命ではフランクフルト国民議会の共和派最左翼となり、ウィーン10月蜂起にも駆けつけるが、反革命の勝利によってローベルト・ブルームと共に死刑判決を受けた。恩赦されアメリカに亡命。アメリカでは当初、奴隷制廃止運動にも取り組むが、経済的困窮が彼の思想にも影響し、やがて奴隷制を是認し、ドイツ本国の反動的君主制にも賛同していく。1857年に許されてドイツに帰国すると、三月革命期の面影は無く、ドイツ帝国の権力側に立ち外交官となる。1888年に引退し1893年にチューリッヒで死去。

晩年のユリウスは、自由なカイルハウ学園を評価しながらも、人間は基本的に平等ではないとする優生思想をもち、万人平等の教育を否定している。また、同園のあまりに経験主義的な教育方法が、無責任な放任主義になりうることも批判している。叔父フレーベルについても、魅力的な人物であったと振り返りながらも、その独善的で容赦なく他人を否定し、世話になったのに困窮しているユリウスの母親を見捨てたとして彼を憎悪している。もちろんユリウスの「言い分」が全て正しいとは限らないだろうが、本稿は、フレーベルの人物そのものとカイルハウ学園の実際を知る上で非常に参考になる資料だろう。